

1 学校教育目標

学ぶ 鍛える 思いやる

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	安心・安全な学校生活の実現 1 正義の通る学校 2 確かな学力をつける学校 3 豊かな心を育む学校 4 健やかな体を育む学校 5 地域に愛される学校
○児童・生徒像	新たな社会を牽引する人材の育成 1 文章や情報を正確に読み解き、対応する力をもつ生徒 2 様々な分野に対して好奇心、探求心をもつ生徒 3 他者の意見を受容し、調整する力を身につけた生徒 4 困難なことを乗り越える力をもつ生徒 5 価値を見つけ出す感性と力を備えた生徒
○教師像	学びあい、高めあう教師集団 1 生徒に愛情をもち、指導ができる教師 2 授業改善・授業力向上に意欲のある教師 3 教育公務員としての自覚をもち、生徒・保護者・地域から尊敬される教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学校の現状と課題

本校の最重点項目課題は、生活規律の確立と学力向上である。生活規律の確立は学力向上の基盤となる。600名弱の生徒集団が安心・安全な学校生活を送るためには、どのような工夫や心構えが必要であるかを第一に考え、主体的な生徒の活動を取り入れながら、様々な取組を実践していく。

昨年度9月以降から始まった基礎学力の定着、読解力向上の取組を継続して行っていく。

2 成果

生徒の学力向上には、教師の授業改善・授業力向上が不可欠である。昨年度から実施した教師の授業観察週間と研修の実施は今後も継続していく。生徒の授業アンケートでは「学ぶ楽しさ」が概ね90%となった。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） H:平成 R:令和				
		H30	R1	R2	R3	R4
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	生活規律の確立、規範意識の醸成	○	○	○	○	○
3	学校、家庭、地域の協働による生徒の育成	○	○	○	○	○
4	支援の必要な生徒、不登校生徒への継続的支援	○	○	○	○	○

5 令和2年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標正答率・通過率)		実施結果 (正答率・通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
基礎的・基本的学習内容の定着 文章や情報を読み解く力の育成		年度末到達度確認テスト正答率 55% 令和3年度区調査通過率52%		年度末到達度確認テスト正答率 1年生正答率55% 2年生正答率55%		年度末到達度確認テスト正答率が1年数学以外 達成基準を下回った。学習の定着状況と具体的 な取組は6(1)を参照。		○	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクション プラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	朝学習・補 充教室の 徹底	5教科 (国社数 理英)	平均週 4日	各学年・教科担当 補充学習・各種コンテスト	R3区学力調 査	各教科D層の 3%減少	コロナ対策のため、 朝学習の時間は短縮 したが、補充の充実 を図った。D層は 平均7.5%減少	目標は達成できた。 感染症対策をしながら 継続実施。	◎
2 継続・ 新規	読解力向 上の取組	全教科 (国語・ 社会を中 心に)	定期考 査後1 週間	国語・社会を中心とした NIE活動の実践。 読書活動の推進。	R3各種学力 調査	各種学力調査 における読解 力の理解を問 う項目の正答 率の向上。 図書館利用者 の増加。	図書室の利用人数は 2倍以上増加した。 数値の結果は出せな かったが、「読む」こ とへの抵抗感は減少 した。	現在の取組を継続、 発展させていく。	○
3 継続	教員の授 業力向上 の取組	全教科	通年	全教員 足立スタンダードの徹底。 十三中スタンダードによる 授業観察週間の設定と振り 返り研修の実施。 ICTの積極的活用。	生徒による授 業アンケート	「めあて」「ま とめ」の実施 100% 「指示や説明 のわかりやす さ」80%以上。 「学ぶ楽しさ」 80%以上。	授業アンケートや区 意識調査では全学年 全教科がほぼ目標値 を達成することがで きた。ICTも全学 年全教科で活用して いる。	今後も現在の取組を 継続するとともに、 ICTを活用した先 進的な取組を実践し ていく。	○

重点的な取組事項－２		生活規律の確立、規範意識の醸成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生活規律の確立、自己肯定感、自己有用感、帰属感の醸成		生活アンケート等による該当項目前年度比3%アップ	該当項目全てが3%アップは達成できなかったが、区、全国の平均を上回る結果となった。	次年度は、自律心を育成する取組を重点的に展開していく。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
安心・安全な学校生活を送るために生活規律の徹底	生活アンケート「あいさつ、服装、持ち物などについて、学校のきまり」を守っている90%以上。	生活指導の徹底。 生徒会役員会や学年委員会を中心に、生徒主体的な活動を取り入れた生活規律徹底のための活動を展開。	意識調査の結果、各学年100%近い数値結果となった（1年97.6 2年 96.4 3年 98.6）。授業点検等生徒主体の活動を取り入れ、今後も生活規律の徹底を図る。	現状を維持できるよう、より発展的な取組を来年度は実施したい。	◎
いじめ防止に向けた取組の実施と早期発見早期対応	いじめアンケートによるいじめの申告が各学年0を目指す。	生徒会役員会を主体とした生徒のいじめ防止活動の推進。「いじめゼロ」宣誓書への署名活動の実施。	「いじめゼロ宣誓書」は生徒会執行部主体の活動として実施し、署名100%を達成した。	いじめアンケートによるいじめ申告が0にはならなかった。1年生の一斉登校後のトラブルの報告が数件あった。報告された案件は全て解決済みである。来年度も現在の活動を継続していく。	○
		休み時間等の巡回。生徒の見守りを常に行い、早期発見早期対応につなげる。	巡回指導は継続して行われている。トラブルの早期発見・早期指導につながっている。		
		SC・SSWとの連携 生活指導部、いじめ防止対策委員会を中心とした組織マネジメントによるいじめ対応。	SC、SSWとは生活指導部会、特別支援委員会で定期的な打合せ、報告がなされている。いじめが認知された時点で、いじめ防止対策委員会を開催し、情報共有と対策を検討している。		
情報モラルの醸成	生活アンケートにおけるSNSトラブルに巻き込まれたことがある生徒の割合1%以下。	QUアンケートの結果分析とQU研修会の実施。	講師を招聘し、QUの結果を論理的に分析した。	生徒の実態にあったセーフティ教室の実施と、適時情報モラル教育を推進していく。	○
		セーフティ教室を軸とした情報モラル教育の実施。	LINE未来財団によるセーフティ教室を実施した。 SNSのトラブル発生率は1%未満である。		

重点的な取組事項－3		学校、家庭、地域の協働による生徒の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
地域人材を活用した教育活動の実践 地域への帰属感・誇りの醸成		生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上	今年度は地域行事が中止になり、地域人材と触れ合う機会が全くなかったが、72%と目標値は達成できた。	生徒が地域との結びつきを日々の生活の中で感じている。この状態を維持していきたい。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
地域人材を活用したキャリア教育の実践	保護者アンケート「学校はキャリア教育によく取り組んでいる」各学年3%アップ。	開かれた学校づくり協議会を中心とした地域人材による「職業人の話を聴く会」（1年）マナー講座（2年）、面接指導（3年）の実施。	感染症対策のため、「職業人の話を聞く会」（1年）のみ実施予定である。学校評価アンケートにおいて「キャリア教育」の項目は「わからない」が30%と増加した。	保護者への授業公開などの機会が減少し、キャリア教育についての理解が得られなかった。	△
地域と協働した活動の推進	生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上。	生徒会役員会を中心としたペットボトルキャップの回収。感染予防における地域との連携。	生徒会執行部を中心としたペットボトルキャップの回収のみ実施。地域と連携した活動は中止。感染症対策においては地域からの協力があった。 地域との交流が無かったにも関わらず、「地域に貢献できる大人になりたい」は平均72%であった。	来年度、感染症対策を優先しながら地域との協働活動を実施したい。	○

重点的な取組事項－４		支援の必要な生徒、不登校生徒への継続的支援			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
不登校生徒への支援 特別な支援を要する生徒の情報共有 特別支援教室の円滑な運営		教室復帰意欲、学習意欲をもつ生徒の増加 関係諸機関との円滑な連携 取り出し授業の円滑な実施	教室復帰の生徒は増加し、不登校率もわずかだが減少した。関係機関との連携や取り出し授業の実施は円滑に行うことができた。	コロナ禍での支援の在り方を探っていきたい。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
特別な支援の必要な生徒に対する情報共有と適切な支援	特別な支援の必要な生徒の居場所作り。	定期的な特別支援教育委員会の開催。 SC、SSWと連携した多面的なカウンセリングと支援。 特別支援教室への円滑な接続と連携。	SC、SSWとともに定期的な特別支援教育委員会を開催することができ、円滑な情報交換ができた。 SCによる全員面接の結果、支援が必要な生徒をカウンセリングにつなげることができた。	コロナの影響もあり、精神面でサポートが必要な生徒は増加している。生徒・保護者によりそう支援を行っていききたい。	○
不登校生徒への支援と外部機関との連携	教室復帰意欲、学習意欲をもつ生徒の増加。 不登校学校復帰率の増加及び出現率の低下（1～2％）。	SC、SSWと連携し、本人、保護者への適切な支援の在り方を検討。 特例課程教室あすテップ、適応指導教室チャレンジ学級等の活用。 個別対応を要する生徒の居場所の確保と学習支援を行うSSルームの円滑な運営。	SSWとの連携が円滑に行われ、引きこもり気味の生徒が断続的に登校できるようになった。個別対応する場所への接続や、SSルームの運営も概ね円滑に行うことができた。 不登校出現率は昨年度と比較し、約1％減少した。	教育相談コーディネーターを中心としたSSルームのより組織的な運営を目指していき、不登校出現率を減少させる取り組みを今後も継続していく。	○
特別支援教室の円滑な運営	取り出し授業の円滑な実施。 十分な情報共有。	特別支援コーディネーターを中心とした特別支援教育委員会等での情報共有と調整。 円滑な個別支援計画の作成と実施。	特別支援教育コーディネーター、特別支援教室専門員のリーダーシップのもと、特別支援教室の円滑な運営、各学年との連携が十分図ることができた。	取り出し授業の円滑実施まで多少時間がかかった。特別支援教育の研修を計画的に進める必要がある。	◎

6 まとめ

1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、臨時休業や教育活動の様々な制約はあったが、その中で新たな「創造」も生まれた。ICT活用の推進は「創造」の中でも大きな位置を占めている。

数少ない行事はZOOMを活用して行われた。企画立案の段階で、対面ではないことへの不安や怖れはあったが、生徒は新しい日常を受け入れ、より発展させようとよく考え、行動できていた。また、できたことが新たな自信につながった。

行事だけではなく、今後は学習面でのハイブリット化を進め、効果的な学習方法の検証を今後行っていきたい。

区学力調査意識調査の結果、生徒は自己肯定感や学習に前向きに向かおうとする意欲は高く、規範意識も形成されていることが明らかになった。教科によって差はあるものの、各教科の「好き嫌い」は概ね60～70%が肯定的評価であり、「理解度」についても同様の結果であった。「わからない」より「理解できている」と感じている生徒の割合は多いが、学力調査等の結果には反映されていない。昨年度より改善されてはいるが、「学力向上」は本校の大きな課題であることに変わりはない。気持ちと現実のギャップの認識をどのようにさせていくかが今後の課題である。また、年度末到達度確認テストでは、1、2年とも、英語の正答率30～40%の層が厚いことが大きな課題であり、学習意欲は向上したが、基礎学力の定着に課題が見られる。Writingの強化が必要であり、より一層の授業改善が求められる。

3年生の国数におけるA層、B層の伸びや、2年生の各教科D層の減少は、大きな進歩と言える。教員の授業力向上の取組を継続し、ICTを効果的に活用した学習方法を今後も推奨していく。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、保護者や地域を招いての行事は全て中止となった。その中であっても、常に本校に向けられていた温かい支援の数々には「感謝」以外の言葉が浮かばない。地域の子供は地域の手で育てるといふ熱い思いをいつも感じていた。

本校が「地域に愛される学校」であり続けるために、必要なものは何か、定着しなければいけない力は何かを、各種学力調査のデータを分析し、また、保護者・地域の声を参考にしながら考え、実行していく。

予測困難な時代であっても、大切なのは「人と人のつながり」であることを忘れずに、前進していきたい。

(3) その他（学校教育活動全般について）

今年度のスローガン「自律」「協働」「創造」を設定した時は、2020年が新型コロナウイルスにより不安で不確定な年になることを予想していなかった。しかし、3月以降、このスローガンのもつ意味が以前にも増して大切なものであることを、身をもって感じている。

予測困難な時代だからこそ、自らを律し、仲間と協働して、新しい価値を創造することは、新しい日常を送る上で、必要不可欠なことである。

学校再開以来、生徒、教職員とも新しい日常での教育活動が円滑に進むよう、よく努力していた。

どのような状況になろうとも、自分を律することを大切に、困難を乗り越え、他者と協働して、新しい価値を創造する学校でありたい。